

人を動かすのは
うれしい、おいしい、たのしい”



富山市長
森 雅志 (もり・まさし)
1952年富山市生まれ。富山県議を経て2002年、旧富山市長選で初当選を果たす。'05年の合併以降も市長を務め、現在通算四期目

公

公共交通を軸としたコンパクトなまちづくりを政策として掲げる富山市。こうした新しい街のあり方は、欧州などでいち早く採り入れられてきたものだが、富山市の見据える未来像は、これから我々が直面するであろう少子

高齢化時代を踏まえた「富山型コンパクトシティ構想」となっているのが大きな特徴だ。「お年寄りの気持ちをサポートするものにするには、やはり外出機会をつくるのが第一。街を歩く人と会う、お話をする。そういう機会をたくさんつくってもらうことが地域の活性化につながり、そして環境未来都市の成果にもつながる。そういう思いでさまざまな仕掛けをつくってきました」

そう語る森 雅志・富山市長。富山市では高齢者が街へ出やすくなるよう路面電車、バスなどの割引制度も用意している。これは65歳以上を対象に利用料金を市内中心地で降りたときのみ、1回100円とするというものだ。

「1回100円だとうれしいし、気軽に利用したいと思うようになるでしょう。富山市の高齢者人口は約10万人ですが、この制度は1日平均で2500人以上が利用しています。つまり2・5%の高齢者が毎日外出しているということになるわけです。ここでのポイントは中心市街地で降りたときのみ割引になるということ。結果、市街地商店街も元気になる」

祖父母が孫と外出する際、動物



北陸新幹線の開通に合わせ、ライトレールと市内電車も接続される予定。利便性もさらに高まる

園や博物館など公共施設の利用料を無料にする「孫とおでかけ支援事業」も、たいへん好評だ。「お爺ちゃんお婆ちゃんもうれいし、アイスクリームを買ってもらって孫もうれいし。外出機会を増やすことは元気な高齢者をつくることにもつながりますし、家族の結びつきも再構築できる。去年、この話をマルセイユのOECD会議でしたところドイツのシュトゥットガルト市長から「入場料の穴埋めはどうやってするのか」と訊かれましたが、穴埋めはしなくていいんです(笑)。それ以上に飲食や遊具などの売り上げが上がって、富山市全体も活性化していく。そのことはデータでも証明されています。そうやって富山市は人も街も元気になってきたんです」



公共交通で暮らせるコンパクトな街に

2005年の合併により、富山県のおよそ3割の面積を占めるようになった富山市。その富山市でいま、市街地を中心としたコンパクトなまちづくりが進行中だ。環境に配慮した未来志向のまちづくりは、目の前に迫った高齢化社会だけでなく、「未来のために富山市はいかにあるべき」という課題も踏まえつつ、圧倒的なスピード感で進んでいる

TOYAMA
C I T Y

3つを核にした地方都市の未来像

これからの地方都市は、どのようなマスタープラン、仕組みのもとに作られるべきなのか。富山市の核となる3つの手法を見てみよう

1-1 公共交通を軸としたコンパクトな、まちづくり

市

街地居住による魅力的なライフスタイルと、高齢者が外出しやすいまちづくり。この中核的役割を担っているのが、LRTと呼ばれる次世代交通システム（車両の低床化、ホームのバリアフリー化、低騒音化などを実現）。富山市内には市内環状線を走る『セントラム』、旧富山港線のインフラを活用した『ポータル』などが走り、市民の足として大いに利用されている。公設民営という運営のあり方も特徴だ。

「旧富山港線時代はラッシュ時30分に1本、日中は1時間から10分間に1本の運行でしたが、ポータルではラッシュ時は10分間隔、日中も15分間隔で運行、終電時間も繰り下げ利便性を大きく改善しました。利用客数も平日2・2倍、休日3・3倍にまで増えています。富山市と連携して市内指定の花屋で花束を購入すると無料乗車券が当たるサービスなどもやっています」（富山ライトレール株式会社 経営企画部長・室 哲雄氏）

誰にでも利用しやすいLRTネットワークの形成



車軸をもたない構造とすることで低床化を実現（左）。'06年にはグッドデザイン賞も受賞、'07年にはブルーリボン賞も受賞した（右）

LRTとても便利です！

左/富山市 都市整備部 参事 路面電車推進担当 谷口博司さん
中/富山ライトレール株式会社 経営企画部長 室 哲雄さん
右/富山ライトレール株式会社 アテンダント 岡本理恵子さん
富山市と富山ライトレールが一体となり旧富山港線をリニューアル。富山駅北00分発の便には案内役のアテンダントも添乗

Point!

+αで活動範囲が広がる



歩行補助車 (4-Wheeled Wailer)



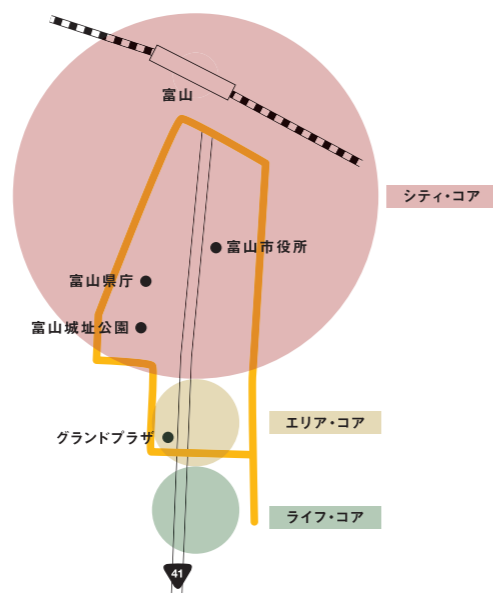
自転車市民共同利用システム(アヴィレ)

公共交通で市街地に来た人たちの移動利便性を高めるための工夫も各種用意されている。24時間365日利用可能なレンタルサイクル「アヴィレ(下)」はフランスのパリで使われているのと同じシステムを導入したものだ。高齢者向けには、富山大と共同開発した歩行補助車(上)を用意、現在実証試験を進めている

「お団子と串」という基本概念

まちづくりはコンパクトにしたいが、移動の利便性も確保したい。富山市は公共交通手段をブラッシュアップ、各エリアをつなぐ「串」とした

シティ・コア(都市核)	エリア・コア(地域核)	ライフ・コア(生活核)
都市の顔としてふさわしい芸術、文化、娯楽、交流などの機能をもつ活力や賑わいにあふれた駅周辺エリア	大型スーパー、病院、金融機関などの都市機能を備える。日常的な生活ニーズがほぼ満たされる駅周辺地域	日常生活に必要不可欠なスーパーなどの施設があり、人口密度も高いエリア。他のコアへのアクセスも容易



【現在の全人口】
(平成17年国勢調査結果)
421,239人
うち便利な公共交通の沿線人口
117,560人(28%)

【20年後の全人口】
(富山市将来人口推計報告書)
389,510人
うち便利な公共交通の沿線人口
162,180人(42%)

富 山県のおよそ30%の面積を占める富山市は、じつは日本一面積の広い市でもある。人々は自動車で移動し、公共交通の利用頻度は下がり、宅地開発も郊外へどんどん広がっていた。こうした流れに逆行する形で富山市がコンパクトなまちづくり、市街地の人を呼び込む施策をあえて目指したのは、なぜなのだろうか。「'05年時点で市街地に住む人は、人口のおよそ28%でした。それが

規制強化ではなく、うれしくなる施策で誘導

「コンパクトシティ構想」を進めてきた結果、この10年で32%ほどまで増えてきました。私たちは、この数字を20年後には42%にしたいと思っていますが、そのためには『市街地に住むといいことがあるね』と市民の皆さんに思ってもらいたいです。市街地に住むと補助が出るというの、そうした試みのひとつですが、普段の生活だつて豊かに

「コンパクトシティ構想」を進めてきた結果、この10年で32%ほどまで増えてきました。私たちは、この数字を20年後には42%にしたいと思っていますが、そのためには『市街地に住むといいことがあるね』と市民の皆さんに思ってもらいたいです。市街地に住むと補助が出るというの、そうした試みのひとつですが、普段の生活だつて豊かに

「戦後、区画整理に賛成してくれた人がいたから今の富山市がある。それを私たちは忘れちゃいけない。そうした過去の人たちの思いも大切にしながら、責任あるまちづくりをすることが、市としての使命だと思っています。ただしあくまでも楽しく、おいしく、おしゃやかに。ここが大事なところですよ(笑)」



自治体の首長にはビジョンを語り、人を引き込む力も必要。富山市のスポークスマン役としてこれ以上の適役はいないだろう

2 質の高い魅力的な市民生活づくり

国 内ではまだあまり馴染みがないが、ヨーロッパでは『予防医学』と呼ばれる考え方が広く浸透している。これは病気、あるいは介護が必要になる前の段階で健康を維持しようという考え方に基づいたものだ。2010年7月にオープンした『富山市角川介護予防センター』も、まさにそんな施設のひとつである。

全国でもめずらしい天然温泉を利用した介護予防施設

温泉プールで機能回復

富山市角川介護予防センター

2011年7月オープン。利用者は体力測定のと医師のカウンセリングを受け、水中運動や温熱療法などを行う。個別プログラムは体調や効果に応じて3ヶ月ごとに見直されるということで、かなり本格的だ。人と会うことで元気になった、仲間が増えた、気分が若くなったなどの声も多いという。



温熱療法も大好評です

保健師・館長
一鳥志伸さん

「70～75%の方が膝の痛みや腰痛がなくなった、あるいは減少したというアンケート結果も出ています」と館長の一鳥さん

派手な水着で元気になるう！というのも森市長のアイデア



子どもも楽しそう

日頃の手入れは万全！

右/芝園町二丁目公園愛護会長
白木勇さん
左/芝園町二丁目町内会長
長田憲勇さん

世話役の白木さんと長田さん。子どもたちはラジオ体操の際にミニトマトを食べたり、大根掘りをしたりしているそう



子どもたちの笑顔がうれしい

コミュニティガーデン

富山市芝園町二丁目公園につくられたコミュニティガーデンは、もともと古くから住む住民と新しく市街地に転居してきた住民の交流機会を増やすための工夫として、2013年3月から始められたもの。旧砂場を花壇とし、市が造成した区画では野菜作りも行っている。ミニトマト、枝豆、さつまいも、大根などを育てている。

Point!

公共交通との繋がりもカギとなる

乗車率の低い路線は本数が少なくなる、というのが常識だが、富山市の公共交通網はあくまでも市民、とくに高齢者の利便性を考えて設計、運営されている。移動したいと思ったときに装置としてそこにあることが大事だというのが、基本理念なのだ。



市内循環バス「まいどはや号」。まいどはやは富山弁でこんにちは、ありがとうなどの意味

正しい姿勢でらくらく歩ける

歩行補助車(4-Wheeled Walker)

富山大歩行圏コミュニティ研究会を中心に開発。お年寄りが使って便利なもの、まちなかに置いてシェアして使える機能などを備えている



富山大学 大学院
医学薬学 研究部
地域看護学 准教授
中林美奈子さん

「歩行が楽になれば市街地での滞在時間や楽しいことも増えると思います」と中林さん

歩くことで元気に！

まちなかのステーションでの利便性を考え、スタッキング可能となっている

3 地域特性を充分に活かした産業振興

「富 山市のやっていることは、夢があつてわくわくする。そう思ってもらうことが雇用の安定、イターン、Uターンにもつながっていくんじゃないでしょうか。都市のイメージアップには、そういった効果も大いにあります」

これも森市長が「ねづね語って」ること。となれば、地元の企業を応援し、その技術を外に向かってアピールしていくこともまた、重要な役割をもつといえるだろう。

その代表的な例が、この春から稼働する『牛岳温泉植物工場』と農業用水路の流れを利用した『小水力発電システム』だ。とくに1月から実証実験が始まったばかりの小水力発電は、径の小さな水車を縦に重ねることで省スペースを実現、設置も1日ででき、景観も損なわない（外部から水車が見えないようにも設置可）など、多くの利点をもっている。これはたとえば東南アジアの農山村でも活用可能な技術だろう。富山市ではそのための動きも始めている。

他にないもの、オリジナル技術で世界に挑む

視察でも人を呼べますよ

株式会社 健菜堂
代表取締役
石橋隆二さん

JC(日本青年会議所)出身で地元企業の経営者とも親交の深い石橋さん。「えごま」油の機能性にもかなり注目しているとか



1.工場内では栄養素、温度などすべてが管理され農薬は一切使わない。エアシャワーも完備
2.3.ヒートポンプ、太陽光発電なども活用される



本格稼働で月産200万枚を予定

牛岳温泉植物工場

生食用の「えごま」の葉を水耕栽培するための工場。農薬は一切使わないため、生食用として最適なか、LED照明を使うことでポリフェノール含有量も増えるという。50日で出荷でき、月産200万枚程度を予定。「えごま」を中心とした商品開発はもちろんだが、日本各地からの施設視察団誘致なども視野に入れた上での開発だ。「えごま6次産業化推進グループ」には現在、約70社が加盟している。



富山高等専門学校
機械システム工学科
准教授 博士(工学)
白川英観さん

「少ない水量でも1～2kWの電力を安定して供給できるシステム。さまざまな利用可能性があると思います」と白川さん



富山の風土に合っています！

海外での利用など可能性ひろがる

小水力発電システム

水車を縦に置くという画期的なシステムは中部7県9校の高専による「小水力発電アイデアコンテスト」から出てきたものだ。雪解け水や湧き水の豊富な富山は農業用水路に水の勢いを減らすための落差溝が設けられているが、この落差溝を有効活用して発電を行うことができる。水車は富山高専とユニオン産業(株)、電力変換装置は富山大学と(株)シキノハイテックの共同開発によって作られている。